

駐妻のヒューストン日記

第230回 千葉紀久子さん

1年目の戸惑い

わが家は1年前にヒューストンに引っ越してきて、2人の息子は現地校(Kinderと2nd Grade)に入りました。最初の半年間、英語が話せないためか、特に長男は昼休みに友達から「Go Away!」と言われ、仲間に入れてもらえず、一人ぼっちでグラウンドの椅子に座ってやり過ごす日々が続きました。私にできることは、子供たちに英語のTutorやオンラインレッスン、放課後のクラスメートとのプレイデートなどを入れて、とにかく英会話に慣れる時間を作り、早く友達との意思疎通ができるようにサポートすることだけでした。そうして1年目が終わる頃には努力が筋トレのようにじわじわ効いたようで、現地校で英語を全く発しなかった次男も、友達とグラグラと笑っておしゃべりできるようになり、長男も「Go Away!」と言われた友達の家で一緒にプールに飛び込むような温かい関係が築けるようになりました。

2年目で気づいたこと

私にはわからなかったことがありました。どうやったら子供達が親友を作れるのか。日本では保育園や学童で長く時間を共有する友達があり、遊ぶ中で自然に親しい友達ができていました。しかしヒューストンでは、子供達が幼児から小学生に成長し自ら人間関係をつくる年齢になったこともあり、現地校に通ったり、公園で遊んだり、習い事でサッカーに通っても、友達が増えたり劇的に仲が深まる様子はなく、どうすればもっと友達と充実した時間を過ごせるのかわかりませんでした。

そんな時、同じクラスのママ友に「放課後何をしているのか?」と聞くと、「なぜ次シーズンの野球を申し込んでいないか?」と逆に聞かれました。私は、まずスポーツをやるのが前提の会話に面食らいました。現地校のあるMemorialエリアでは、Pre Kinderくらいから季節ごとに地域のボランティア団体や教会でスポーツを始める子供たちがたくさんいることを知りました。わが子たちは運動をしない私たち両親の影響で、スポーツ



▲6歳以下チームの試合後にコーチが一人一人の頑張りを具体的に褒めてくれ、子供達のやる気を引き出してくれます。

経験が全くありませんでしたが、学校の友達がやっているという一点でわが子供を説得し、この5月にSchool Districtのサッカーチームに登録してみました。登録して4ヶ月後、現地校や近所のフィールドで練習が始まりました。フィールドに行くとき、そこには男女共に大勢の学校の友達がサッカーやフットボール、ソフトボールをしています。まるで日本の中学校の部活のように学校生活の延長線上でスポーツを楽しんでおり、「みんなここにいたのね…」と思いました。

いくつかの試合が重なる時は100人くらいの子供達が集まり、保護者の大歓声の中、熱戦が繰り広げられます。練習試合では、相手チームも自分のチームもその多くが同じ学校の友達同士で、まるで運動会のような盛り上がりです。保護者たちは送迎や差し入れの買い出しなど協力し合い、チームを応援します。初心者で最初はやる気もなかったわが子供でしたが、週3、4日放課後や土曜日に練習、試合を重ねていくことで、少しずつチームに貢献できるようになりました。学校の昼休みも放課後も一緒に練習したり、遊んだりしていくうちに、友達とどんどん仲良くなりました。

私もコーチや保護者達の早口の英語や用語が未だ聞き取れないことも多いです。わが子のやる気をなんとか引き出そうとしてくれるコーチ、名前を呼んで応援してくれる保護者達の姿に、何度も胸が熱くなりました。わが子の一生懸命な姿に声援を送り、チームに関わっているうちに自分もその一員になれた気がします。

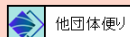
3年目に向けて

サッカーだけでなく、冬はバスケットボール、春は野球、夏は水泳など季節ごとにスポーツを始める機会があるのは、単に放課後の習い事というよりは、夏が長く、車で移動する生活の子供達にとって、体を作り、健康に過ごすための大切なきっかけであるだけでなく、何よりも子供達自身が友達との信頼関係を築き、まわりから自分が必要とされている実感を得られる素晴らしいチャンスだということがわかりました。

私は独身時代にアメリカに1年滞在した経験がありましたが、この度家族で海外生活を送る中で新たに沢山のことを知ることができました。小学生の親の視点から視野を広めることができ、子供達には感謝しかありません。彼らが共に遊ぶ仲間達との関係性が深く、広くなることで学校生活の充実度が上がっているようです。そして自分でゼロから友情を築きあげた経験と自信が今後の新しいチャレンジする気持ちに繋げられるよう、今日もフィールドで声援を送ります。



▲8-9歳チーム 長男が初めてペナルティキックを指名された時は、チームメンバーが「You can do it!」と励ましてくれ、ゴールを決めることができました。



JAPAN
AMERICA
SOCIETY OF
HOUSTON



▲ 開会の挨拶: 尾根氏 (Mitsubishi Heavy Industries America)

ヒューストン日米協会(JASH)は、ファンディングイベントであるJASH BASH 2023を10月24日(火)、Bayou Music Centerにて開催しました。当日は在ヒューストン日本国領事館の村林総領事ご夫妻をはじめ、JASHをご支援くださる企業、団体、個人、約230名の方々に臨席賜りました。

マリアッチバンド演奏に出迎えられたゲストの方々には、レセプション会場で日本酒やテキーラを味わいながら、スポンサーの方々よりご寄付頂いた日本行き航空券、ホテル宿泊券、レストランギフト券、ウイスキー等が出品されたサイレントオークション、フォトブースや版画体験などにご参加頂き、落ち着いた雰囲気でのVIPレセプション会場では、寿司、ビリヤードなどを楽しんで頂きました。

そしてディナー会場に移り、ヒューストンのトップシェフであるヒューゴ・オルテガ氏と堀内学氏による、日本料理とメキシコ料理のスペシャル・コラボレーション・ディナーを堪能頂きました。その後行われた授賞式では、日米間の経済、文化交流への多大なる貢献を称え、第6回ヒューストン-日本友好賞がボブ・ハービー・グレーターヒューストン商工会議所会頭へ、第6回ジェー・トーマス・シーファー・リーダーシップ賞がNYをベースに活躍する日系アメリカ人作家であり、シェフのキャンディス・クマイ氏へ授与されま



▲ シェフのオルテガ氏と堀内氏

した。ヒューストンの食文化における日本料理の影響力の高まりを称賛するとともに、当地域における日米の強固なビジネス関係をゲストの方々和祝うことが出来ました。当日の様子は、[当協会ウェブサイト](#)をご覧ください。

今回もヒューストン日本商工会より、多くの会員企業の方々のご臨席と共に、ご支援とご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。JASHは今後もヒューストン日本商工会との連携を密にし、ヒューストン地区での日米の文化、教育、ビジネス交流に一層貢献できるような活動を続けて参ります。引き続きご支援とご協力を何卒よろしく御願ひ申し上げます。



▲ 左より: ブラウンJASH事務局長、キーガン氏 (Mitsubishi Corporation Americas)、ハーベイ夫妻、クマイ氏、村林総領事夫妻、ドラムJASH会長夫妻